

福祉の学び舎

7

ローマ字は小学3年生で習う。英語などフレン語のアルファベットを日本語で表記したものだ。例えば「し」(si(訓令式)とshi(ヘボン式)の二通りがある。

後者を発案し、自ら編さんした日本最初の本格的な和英辞典『和英語林集成』(1867年)で使ったのが、「美国平文先生」ことアメリカ長老派教会宣教師ジェームス・C・ヘボン(1815~1911)だ。今年160年目を迎える明治学院の創設者である。

ヘボン塾

米ペンシルバニア大学で医学を修めた彼は、徳川幕府による大政奉還8年前の1859(安政6)年、キリスト教を広めるためクララ夫人とともに横浜の土を踏んだ。外国人居留地で診療のかたわら、男女共学の英学塾「ヘボン塾」を1863(文久3)年に開講。首相・蔵相になる高橋是清(1854~1936)や外交官の林董(1850~1913)ら逸材を育てた。ヘボン療養所の礼拝堂ではヘボンの後任として第2代総理

明治学院大学 ①

Do For Othersの理念で



ヘボン塾跡地に建つ記念碑

(学院長となる元会津藩士・井深槐之助(1854~1940)も18歳で受洗している。さらに1871(明治4)年には、やがてフェリス学院大学(横浜市)の母体となる女子の洋学塾が独立。また、18年にわたるヘボンの完全無料の救療思想に触れ、盲学校や医療に携わる日本人もいた。後に開塾の年をもって学院

の起源(創立年)と定めるが、この時まいたヘボン・スピリットこそDo For Others(「他者への貢献」)——。今に至る学院の理念だ。「視野を広げ、周囲を見る余裕を持ち、自分だけよければよいという考えはやめよう」というメッセージです。村田玲音学長(経済学部教授Ⅱ(68))はやさしく解説する。

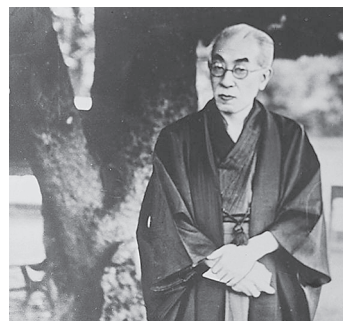
藤村と賀川

長老教会とカルヴァン派に近い改革派教会の流れをく

る。卒業記念に植えた樹イヌグスの前に立つ島崎藤村。恩師・井深槐之助の葬儀で学院を訪れた(1940年6月26日)

ンは初代総理に迎えられている。多くの人材が学院の門をくぐった。中でも知られているのは普通学部1期生の文学者・島崎藤村(1872~1943)、そして18年あとの1905(明治38)年に旧制徳島中学から15歳で神学部に入ったキリスト教社会運動家・賀川豊彦(1888~1960)だろう。

英語に磨きをかけようと学院を選んだ藤村は、樹木の多い静かな丘や谷を歩き、宗教の話に耳を傾け、学校の図書



(1920年)となつて一世を風びしていく。これも縁というものだろう

卒業記念に植えた樹イヌグスの前に立つ島崎藤村。恩師・井深槐之助の葬儀で学院を訪れた(1940年6月26日)

む東京一致神学校・東京一致英和学校・英和予備校の合併により、現在地「白金の丘」に明治学院の校名を掲げたのは1887(明治20)年秋であった。文学や物理学などの専門学部、上級学校への進学に備える普通学部、そして神学部の三つだ。辞典の印税を寄宿舎の建設資金などへ寄付したヘボ

館で西洋詩人の伝記を読みふけたと、「明治学院の學窓」(『新片町だより』1932年)で懐古している。一方、読書家の賀川は平和主義ゆえの一家言から、学友にいじめられるなど苦労したらしい。2年後に神戸神学校へ移るが、長編小説『破戒』(1906年)で人間差別の不合理を問うた藤村を1908(明治41)年に訪ねている。このとき持参した自作『鳩の真似』は、のちに大正の大ベストセラー『死線を越えて』

朝鮮人留学生を守る

賀川の名が再び人々の口に

う。広くのぼるのは、関東大震災(1923年9月)のときだ。死者約10万人。海路、神戸から横浜へ着いた彼は、朝鮮人に対する流言飛語にあおられ、竹やりなどで「凡ての人が武装している」と驚く。キリスト教青年会に交じり東京・下町で救済活動。また、学院の学生や教員も警察と協力し、日比谷公園や芝公園で



村田玲音学長

「尋ね人はいませんか」と被災者へメガホンで叫び、安否確認に努めている。この頃、専門学部から改組した高等学部文芸科に5人の朝鮮人留学生がいた。身の危険を感じた2人を都留仙次学部長の計らいで中山昌樹教授宅にかくまった。「出せ!」。

軍力を振りかざす予備役軍人の体育教師に、学部長は「斬るなら斬りなさい。わたしは神の御心に適うと信じ、行動するのみ」と突っぱね、守り通したという(『明治学院大学百五十年史』、大学報「しろかね」12号)。

ただ、学院の中心的存在な

明治学院大メモ

白金(東京都港区)

と横浜(横浜市戸塚区)の両キャンパスに文、経済、社会、法、国際、心理の6学部・大学院を持つ総合大学。学生数約1万2000人。

理事長=山崎雅男▽学院長=小暮修也▽学長=村田玲音。

キリスト教研究所、国際平和研究所など大学・学部付属の10研究機関を有し、系列の中高を備える。米英仏独豪、ブルガリア、エジプト、中国、韓国など世界22の国・地域の80大学およびアジア・キリスト教大学協会と留学・学術交流の協定を結び、グローバルマインドの育成に力を注ぐ。

しかし、待っていたのは時代の風であった。(横田一)

から、神学部の財政負担は重く、白金校地が手狭になったこともあり、神学部だけ東京・角筈(現在の新宿駅付近)へ移転。6年後の1930(昭和5)年には学院から分離、東京神学社と合同で日本神学校を創設していく。この経過の中で高等学部生まれの「社会科」(3年制)、今の社会学部のルーツであった(1928年)。

総理だった田川大吉郎(1869~1947)は次のように抱負を述べ、学生たちに奮起を促した。

「社会……の進歩発展に貢献せんことを期して設けられたのである。……社会相の危険、社会問題の噴出錯綜せる今日の時代に於て、青年学徒の来つて共々に研究せんことを希望する」

7

変わる学科名

明治学院大学 (中)

それでも学生たちは東京の下町で貧しい子どもたちに対するセツルメントを展開。慶應大、上智大、大正大、日本女子大、立正大、日本大、東京帝大、同志社大、そして明治学院の学生有志により「学生社会事業連盟」が組織され、

戦争から平和へ

明学のチャペルで「盛大な葬
会式」（朝日新聞1936年
11月8日）を開き、「高い社
会事業精神を涵養し……以て
邦家に貢献せん」と宣言して
いる。国への協力的な一面を
持っていたが、解散させられ
てしまう。

弾圧下、さまざまな活動が

戦後の学制改革に合わせ、それまでの専門学校から大学に昇格したのは49（昭和24）年のこと。英文学科、社会学科、経済学科の3学科を持つ単一の文経学部でスタートした。いずれも勤労学生のために夜間部（第2部）を置いて。

確かに現存する礼拝堂（ヴォーリス設計で16年落成）のほか、インブリー館（現・歴史資料館）や記念館（1890年竣工の元神学部校舎・一部改修）、ライシャワー館（故・ライシャワー元駐日米大使が16年ほど宣教師の父と

「暗」から「光」の時代へ

沖縄から

活気づき始めた白金キャンパスにアメリカ施政権下の沖縄留学生の姿もあった。那覇

生活した宣教師館。1965年に東京都東村山市の系列中高に移築もあり、明治洋風建物はエキゾチックだったろう。

白金の深い緑

4年ほど米軍施設などで働いたあと、本土渡航のバスポートとドルを手に54（昭和29）年、社会学科の門をくぐった。

屋我さんの気に入った点がもうひとつある。「幼い者の目には森かと思まがう」（『ライシャワー自伝』文藝春秋、87年）ほどにまだ深かった大学や周辺の緑だった。

その頃、沖繩からは米軍の砲火で焦土と化したふ
日本社会事業短大（東京・原宿）への研修生
派遣制度もあり、当初「島崎藤村作詞の校歌碑のそ

礼拝堂（左）と記念館＝白金キャンパス

成も遅れた沖縄へ、日本政府は技術援助名目で大学教員や厚生省の担当者、福祉施設の管理者ら講師を次々派遣している。その一番手（65年3月）は本学の福田垂穂教授（児童福祉・グループワーク論）であつた。

その時分の超人
気教授は賀川であ
る。「女性は大社
学など学ばんでも
よろしい」という
父親の反対を押し
切って明治学院へ
入った元副学長の

ばで校歌を歌つた。チャペル
アワーに教授の説教を聞き、
讚美歌も歌つた。夜帰るとき、
電光に輝くチャペルは幻想的
でまぶしかったですね」。

山崎美貴子・名誉教授（86）
 Ⅱ家庭福祉論・ソーシャルワ
 ーク論、神奈川県立健康福祉
 大第2代学長Ⅱも受講したひ
 とり。夜間部の専任教授だつ

卒業し帰島。児童福祉社として琉球政府に職を得た。米軍基地へ忍び込み、山積みの軍需物資を盗んでは「戦果だ」と自慢しあう非行少年の身元引き受けに児童相談所は追われた――屋我さんの上司はそうつぶっている（『沖縄の児童福祉の歩み』幸地努著、1975年）。

だが、「昼間の学生も聞きに
来て、教室は満員。大きな声
で、両手を広げながらの講義
でした。まだ2、3年生の頃
で、内容を十分理解できない
ところもありましたね。でも、
キリスト教に基づく、人とし
ての尊厳を教える校風は昔も
今も変わっていません」と記
憶をたどってくれた。

(横田一)



山崎美貴子
元副学長



白金キャンパスのへボン像

福祉の学び舎 7

学生が押し寄せた賀川豊彦の講義は「協同組合論」に始まり、「経済心理学」も教えている。優れたレポート（論文）を書く学生10人をたたえ、とくに秀逸の3人へは自腹で奨学金を与えた。学生に慕われるはずだ。

彼の「協同組合原理」（梗概）の講義メモが白金キャンパス内の学院歴史資料館に保存されている。資本主義との政治的・経済的關係▽信用組合▽土地利用組合▽農協▽健康保険組合▽消費組合（現・生協）▽オーストラリアの成功事例——など実に細かい。



講義する賀川豊彦
Ⅱ 歴史資料館所蔵

明治学院大学 ⑦

人生、社会の課題掘り下げ

阿部志郎・元明治学院理事長



生協、農協などほとんどが現在へとつながる。「一連の運動はコミュニケーションを大切に、画期的なものだったと賀川研究で知られる稲垣久和・東京基督教大学特別教授(74)Ⅱ公共哲学Ⅱは評価する。

よき師たち

賀川の講義のやり方も独特だった。教科書はない。大きな紙に墨汁でポイント(単語)

を大書しながら進む。学生にとって追いつくのは大変だったろう。「紙がいっぱいになったらめくって、新しい紙にするのがボクの役目でした」と笑うのは当時助教の阿部志郎・元横須賀基督教社会館長(96)だ。

目前に控えた教授のイスをふり、終戦後間もなく再来日した恩師のエベレット・トムソン教授に乞われ、米海軍基地のある神奈川県横須賀市に教授がつくった館の運営を継

岸川洋治・横須賀基督教社会館理事長



いだ(1957年)福祉の人だ。ただし、非常勤講師として授業は続行。後年、明治学院や東京女子大の理事長、さらに神奈川県立保健福祉大学(2003年設立)の創立

後輩で、いま同科で教壇に立つ新保美香教授Ⅱ公的扶助論Ⅱも「阿部先生の講義には引き込まれましたね。人生で向きあうべき課題を授かり、薫陶を受けた」という。「それに山崎美貴子先生(元副学

かくいう阿部助教もずっと教科書を使わなかった。ハンセン病患者の救済に生涯を捧げた井深八重(1897-

社会学部の自立

1989、ナイチンゲール記章受章)や困窮者との出会い、沖縄の墓制などエピソードや人をたづねり織り交ぜて「福祉の哲学(思想・歴史)」を語り、学生にモノを考えさせ

たという。社会学部社会福祉学科78年入学組の歴史資料館職員、小杉義信さん(63)は「難解ながら、実に中身の濃い授業だった」と思い出す。



新保美香教授



金子充教授



小杉義信氏

午後のチャペルアワー。礼拝堂のスピーカーから160年前と変わらぬ讃美歌が学生の行き交うキャンパスへ広がっていく。(横田一)

士課程)を文学部研究科に置いた(60年)。アメリカ流のソーシャルワーク論が盛んになるにつれ、入学生は増加。5年後には文学部から独立し、社会学部(社会学科と社会福祉学科)として自立していく。

変わる意識

阿部館長の後任(2007年)として社会館長になった岸川洋治理事長(75)は、社会学部の第1期生だ。高校時代に受洗し、ふるさと福岡県から明学へ。石炭産業の合理化に苦しむ筑豊地域で明学や立教大、国際基督教大などキリスト教系大学の学生たちで職につき、西南女学院大(北九州市)の学長・学院長などを勤めたキリスト者である。それからやや間を置いて「スロープ問題」が学内を揺るがせた(朝日新聞1975年4月20日朝刊など)。中軽度の障害学生はすでに在籍。新たに重度重複障害のある青年(聴講生)が入試の願書を出したところ、大学側から受け入れ見合わせを通知され、社会問題に。結局、当人の夢はついで、当時の渡辺栄学部長は「障害者問題に長期的に対応するには……あまりにも受け入れ体制は弱」く、「今でも心残りのする事件であった」と悔いている。

他大学に先がけて大学ボランティアセンターを立ち上げ、障害学生を合理的配慮の理念に沿って支援する現在から見ると隔世の感がある。学生時代、ボランティアサークルで障害学生の学習環境改善に向け活動した社会福祉学科の金子充教授(50)Ⅱ社会政策論Ⅱは「当学科では社会福祉の思想や倫理、人権を重視する授業が多い。誇りです」と新保教授。

「筑豊の子供を守る会」が運動したのはこの時分だが、「当時の学生はセツルメントやボランティアなどに積極的で、実行力があつた」と振り返る。住み込みボランティアとして館から通学し、卒業後もしばらく働いたが、親の介護でふるさとへ戻って教